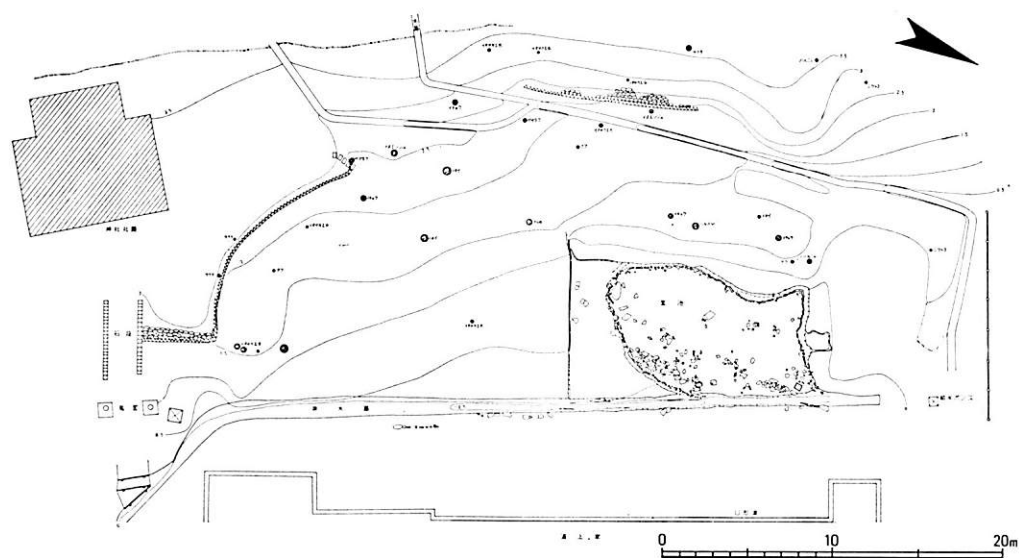


史跡旧下ヨイチ運上家庭園の調査

平城宮跡発掘調査部・埋蔵文化財センター

調査は昭和51年から4ヶ年計画で行っている旧下ヨイチ運上家の全面解体修理工事に伴ない、周辺環境整備の一環として行ったものである。運上家西側の現在空地になっている部分に明治時代に庭園が造られていた事が写真等の資料で判明しているため、庭園を発掘して池の全容を明らかにし、併せて周辺の池形実測も行なった。調査の結果、池は一部が後世の攪乱を受けているが、東西8m、南北12mの規模で、導水部(南側)が口、排水部(北側)が尾びれで、全体として魚の形状をなし、運上家(漁場の経営)に関連した作庭意匠がとられたのではないかと思われる。水深は20cm前後の浅い池で、護岸は抜き取り穴から判断すると、直径5~10cmの杭を密に前後して並べたもので、土留めのための乱杭の形式である。池への導水は東西隅から、明治の写真によると石組による導水路がみられるが、上部は削平され、石組は検出されず、池内部に長辺1m、短辺60cmの面の平らな水落石を検出したにすぎない。池の排水は池東北隅に側石を持つ巾20cmほどの溝を検出している。また池の景石は池の建物側、池東岸に10~40cmの石を並べているが、石の高さが水面にすれすれに頭を出す状況で州浜を形成したものであろう。その他景石が表土排除の際に10数個掘り出され導水部、岸边など要所要所に据えられていたものと思われる。園池と建物の配置から考えると運上家が東西方向から明治24年に規模を縮小して南北方向に造り替えられた際に、山からの水を留める調整池の役目を兼ねてこの池が造成されたものと考えられる。

(田中 哲雄・本中 真)



運上家庭園実測図